

オンデマンドによる大学入学前導入教育「文章表現」の試み

— 2003-2005 年度「総合活動型日本語教育」の成果と問題点 —

細川 英雄・森元 桂子

キーワード

オンデマンド方式・大学入学前導入教育・文章表現・総合活動型日本語教育

はじめに

本稿は、早稲田大学入学予定者対象の大学入学前導入教育（オープン教育センター所管）の中の一つである「文章表現」（オンデマンド方式）について、2003-2005 年度の実施を踏まえ、その成果と問題点を報告するものである。

この「文章表現」科目開設の直接のきっかけは、オープン教育センターからの日本語研究教育センターへの働きかけによる。その依頼は、入学前導入教育として「文章表現」科目設置の要望が多いこと、また入学前教育としての性格・位置づけとして通常の教室での対面型授業を行うことがほぼ不可能であることから、すでに実施されている他の科目（数学・情報等）と同じように、オンデマンド方式の可能性を検討してほしい⁽¹⁾とのことで、2003-2005 年度を試験期間（TA には謝金、担当者は無償）とするとのことであった。

この科目に関する具体的な企画・設計は、細川個人に委託されることとなったため⁽²⁾、細川が従来行ってきた「総合活動型日本語教育」の考え方を、オンデマンド方式の実践として導入することになった。「総合活動型日本語教育」は、第二言語教育として開発したものであるが、元来、母語・第二言語の別を超えた言語学習の理念によって設計されたもので、2000 年度本庄高等学院「日本語表現総合」（牲川・細川 2003）や日本語研究教育センター・日本語教育研究講座「言語文化」等の実績から母語話者にも有効であることがすでに検証済みであることから、今回のオンデマンド授業実施に踏み切ることとした。

1. 「文章表現」のプログラム概要

1-1 科目設計の理念と方法

一般に「文章表現」科目の狙いは、小論文指導のようなものからアカデミック・スキル

の養成のようなものまで多種多様であるが、細川の設計する「文章表現」のめざすところは、「自己把握」と「他者提示」を核とした自文化・他文化の捉えなおしをめざすものである。

オンデマンド授業の性格を考えたとき、この科目設計の一番重要なポイントは、受講者が高いモチベーションを持って、自分自身の文章を作っていくという意識がない限り成立しないということである。一般のオンデマンド講義のような、一方的な情報の授与では、活動自体が立ち行かなくなる。したがって、受講者自身が自分のテーマを発見し解決するような活動にしなければ意味がない。

このため、本プログラムでは、電子掲示板（以下、掲示板）を最大限に活用することとした。受講者は、講義の内容を踏まえ、週ごとに設置された掲示板へ「文章」を提出し、意見や発言を書き込み、レポートを提出するという形で活動に参加する。この掲示板の書き込みには、早稲田大学大学院日本語教育研究科の院生や修士がティーチングアシスタント（以下 TA）として数名参加し、受講者を活動の流れに乗せながら、受講者同士の発言を促し、相互の発言のやりとりを活性化させ、拡散した議論をまとめるといった役割を果たすことになる。TA は同時に、「総合」における重要な理念である、自分の設定テーマに関して「私」の問題として捉える視点を持てる方向へ導くこと、さらにはそれを論理的・一貫性・整合性をもった「ことば」で他者に提示する手助けをすること、学習者（受講者）同士がお互いの問題発見解決に寄与できるような場を作ることなどを念頭において活動に参加した。

1-2 4週間のオンデマンド活動

「文章表現」は、受講者が自分の興味関心のあることをテーマに、4週間の活動を通して2000字程度のレポートを完成させる活動である。1週間ごと、全4回の掲示板上の活動となっている。各週の活動の説明と指示は、この活動の担当者である細川が、事前に各週10分程度の番組として収録した、動画とパワーポイントによる「講義」を、受講者がインターネットにつないだパソコン画面上の「講義」ボタンをクリックすることで好きな時間に視聴できる。受講者には予め週初めにこれを必ず視聴し、毎週の活動にもれなく参加するよう指示を出した。

各回の講義タイトルと活動内容は次の通りである。

	講義タイトル	活 動 内 容
第1回	この授業では何をするのか	自分の興味・関心のあることをテーマとし、400～600字の「動機」を書く。
第2回	コメントを書く、コメントをもらう	お互いの「動機」について、意見・コメントを出し合う。
第3回	自分の結論を出す	コメントを受けて結論をまとめ、2000字程度のレポートを完成する。
第4回	相互自己評価の試み	お互いのレポートを評価し合う。(自分のレポートへの評価も含む。)

2. 附属校対象の2年間の実践—浮上した問題点とその改善

2-1 受講者の期待と実際の活動のギャップ

全3年間の試みのうち、2003・2004年度「文章表現」は、早稲田大学入学予定者の中でも、附属校である早稲田大学高等学院と早稲田大学本庄高等学院の3年生の受講希望者を対象として実施した。

2003年度「文章表現」で最大の難点となったのが、「文章表現」という科目名から受講者が思い描いたイメージと、実際の活動のずれの問題である。これにより、受講者が活動から脱落するという事態が起きた。ほとんどの受講者は、書き方のコツや方法を与える書き方講座のようなものを期待し、知識を吸収することを求めているのである。しかし、この活動はまず自分の興味のあるテーマを自分で選び、自分と興味ある対象との関係や、自分にとっての対象の意味を他者に提示し、他者とのコメントのやりとりを通して、それらをより説得力のある形で表現する方法を自身で見出すものである。さらには、対象と自分との関係や、自分自身をより深く見つめ直すことも要求される。受動的な態度の受講者にとっては、この活動は予想外に負担の大きいものだったと言える。

2-2 掲示板での文字によるやりとりの難しさ

また、掲示板での文字のみのやりとりによる問題も浮上した。掲示板への書き込みという形態では、受講者が自分のテーマについての意見を誰に向けて書いているのか実感しづらい。さらに「書き言葉」は「話し言葉」に比べて余分なものがそぎ落とされるために、コメントも批判的なものはより鋭さを増し、それが受講者を萎縮させ、活動への意欲を喪失させるというものであった。具体的な他者とのやりとりする実感が薄いと感じられる一因として、インターネット上の個人情報保護に配慮し、ハンドルネームを使用している書き込みとしたことによる、匿名性の影響も考えられる。また、同じ掲示板で23名の受講者と4名のTAがランダムにコメントのやりとりを行ったことが、大教室のような環境を作り上げてしまい、受講者が自分自身を主体的に発言すべき存在と位置づけられない状況や、集中した議論のできない状況を生み出したとも言える。

この活動が文章や発言の奥に垣間見える、人と人とのコミュニケーションをめざしながら、文字同士の表面的なぶつかり合いの次元から前に進めなかったことは大いに反省すべきことであった。また、活動に対する不満や要望を、受講者が表情や言葉で伝える手段を持たず、脱落を選ばざるを得なかったことも問題である。担当者の「講義」が事前に収録されたものであるために、受講者とTAが行っているリアルタイムの活動とリンクせず、担当者を受講者の間のインターアクションが断絶していることも検討課題となった。

2-3 双方向のオンデマンド活動へ—2003年度から2004年度へ向け

以上のことから、2004年度に向けて6つの改善を行った。

①活動の告知番組の制作

受講希望者を募る際に、事前説明を充実させ、この活動を理解した上で参加してもらうべく、告知版の番組（動画とパワーポイントを使用したもの）を制作し、インターネット上

で視聴できるようにした。これは、活動内容、担当者・TAの位置づけ、活動の意義等を紹介するものである。

②「講義」の差し替え

高校生が普段あまり目にしないと思われる用語（仮説・インターアクション等）をわかりやすい語に置き換え、詳細に説明する。

③担当者からの「お知らせメール」

「お知らせメール」で担当者から受講者全体へフィードバックを与え、次の週の活動につなげる。

④受講者から担当者への要望受付

受講者が担当者に対し、活動そのものへの質問や要望をメールで送れる環境を作る。

⑤担当TAの配置

受講者のグループ分けと担当TAの配置をし、より具体的な相手とのやりとりをめざす。TAの支援は、文字のみのやりとりであることに十分配慮したものとする。

⑥関係者協力のためのメーリングリストの設置

大学側・高校側・オープン教育センター三者連携のためのメーリングリストを設置し、システム上の問題についてはオープン教育センターと連絡を取り、高校側の協力も得ながら活動を進めた。

この結果、2004年度「文章表現」では予想外の活動だという不満はなくなり、文字による萎縮の問題も幾分解決し、受講者同士の発言も活発にやりとりされた。しかし、逆にTAが批判的なコメントを控えたためか、テーマからそれた発言や表面的な議論が増え、受講者の減少という量の問題に加え、発言やレポートの質を含めた活動の質が問題となった。

3. 全国実施 2005 年度「文章表現」の試み

以上のような附属校対象の2年間の試みを経て、2005年度には全国の早稲田大学入学予定者を対象に「文章表現」の活動を展開した。

3-1 全国実施の課題と工夫

< 活動の目的の明示 >

全国実施の課題は、100名を超える受講者を対象にするということである。大勢の受講者を混乱・当惑させず、一人でも多くの受講者にこの活動を理解して参加してもらうためには、これまで以上にサイト上での説明や指示が具体的である必要があった。そのため、活動開始前に担当者から受講者に向けて配信した「「文章表現」へ、ようこそ。一担当者より愛をこめて」では、次のような明確な言葉でこの活動のめざすところを伝えている。

この講座の特色は、(1) 自分の考えていることを明確にすること（自己把握）、(2) それを他者に向けて筋道を立てて説明する（他者提示）という2点です。この2点を充実させるために、BBSによるメンターとの及び受講者間のインターアクションを最大限に活用します。（中略）この講座は「上手な文章」や「文章作成スキル」を目的とするものではありません。

このような趣旨を踏まえた上で、予め自分の興味・関心のあるテーマについての「動機」をメールで提出してもらったところ、受講希望者は102名に上った。

＜入学後を意識したグループ分けと実名参加＞

受講者は、指定校推薦・AO入試・自己推薦・社会人入試等による大学合格者と附属校からの参加者である。全国各地に点在し、顔を合わせたことがない受講者同士の人間関係を、より具体的なものにするために、1) 受講者を入学後の学部ごとのグループに分け、2) 実名での活動参加、掲示板への書き込みとすることにした。

受講者のグループ分け、メンター⁽³⁾の配置は次の通りである。

グループ名 (受講者数)	政経 A (5名)	法学 A (8名)	一文 ⁽⁴⁾ A (6名)	二文・社学 ⁽⁵⁾ (8名)	商学 A (6名)	理工 A (8名)	人科・国際 ⁽⁶⁾ A (7名)
メンター	M1・M2	M2・M3	M1・M3	M3・M4	M1・M2	M2・M3	M1・M3
グループ名 (受講者数)	政経 B (7名)	法学 B (9名)	一文 B (7名)	教育 (8名)	商学 B (6名)	理工 B (9名)	人科・国際 B (8名)
メンター	M3・M4	M1・M4	M2・M4	M1・M2	M3・M4	M1・M4	M2・M4

(グループのAとBは同学部の受講者を無作為に2グループに分けたもの。メンター4名はM1～4で表した。)

5～9名の受講者を1グループとし、14のグループを作り、各グループ専用の掲示板を設けた。受講者は自分の所属するグループの掲示板のみに参加する(他の掲示板も閲覧は可能)。メンターは各グループに2名ずつ入り、違った視点からコメントを出すことにより、メンターと受講者の間に発生しがちな指導する者・される者という立場の固定化を緩和するようにした。1人のメンターが担当する掲示板は7つ、担当受講者数は約50名であるが、メンターが50のテーマについて個別にコメントをすることは困難と考え、当初はグループ全体へ呼びかける促しを中心に行い、極力受講者同士の発言のやりとりを活性化させる方針を立てて活動に臨んだ。担当者からは受講者に対し「お知らせメール」を毎日送り、受講者が活動の流れに乗って頻繁に掲示板を開き、主体的に活動に参加するよう励ました。

3-2 活動概況

2月14日～3月12日の予定で実施した活動の概況は次のようなものである。

	掲示板参加	活 動 概 況
【第1回】 (2月14日～20日) この授業では何を するか :「動機」の提出	89名	「動機」提出者102名のうち89名が掲示板に書き込みをする。自己紹介等の書き込みが大半を占めた。全国からの受講者が一堂に会していることへの興奮や、離島やへき地から大学の授業に参加している驚きを述べた発言、学部で学びたいことの話など、受講者同士が自由に関係作りをする様子が見られた。事前に書いた「動機」を掲示板にも提出する。
【第2回】 (2月21日～27日)	83名	メンターは全体への呼びかけや発言の整理に徹し、受講者間のコメントのやりとりを見守った。掲示板によってやり

コメントを書く、コメントをもらう	83名	とりの活発さに差が出た。そこで、週の途中からメンターもコメントのやりとりに加わることにした。
【第3回】 (2月28日～3月5日) 自分の結論を出す	68名	「動機」に対して受講者からのコメントが少ないものを中心に、メンターがコメントをするが、メンター1人あたりの担当人数が多く、丁寧なコメントを繰り返すことが大変困難であった。
レポート提出	62名	結論を含めたレポートの提出者は62名。 ※卒業式や引越により、活動の続行に困難のある旨を伝える書き込みが増えた。インターネットカフェや友人宅からのアクセスもあった。
【第4回】 (3月6日～13日) 相互自己評価	35名	メンターが相互自己評価用のスレッドを立て評価を促し、期間も延長したが、評価に参加したのはレポート提出者の約半数で、一部のレポートのみへの評価も多かった。一方で、評価後の書き直しや書き直しのためのコメントのやりとりを積極的に再開する受講者もいた。
(3月14日～21日延長)		
3月20日～22日 最終レポート提出	59名	評価を受けて最終レポートを出すよう「お知らせメール」で指示を出した。評価には参加せずに最終レポートを提出した受講者も多数いた。

3-3 メンターの支援—文字のみによるやりとりへの配慮

この活動は、2週目のコメントのやりとりが要となるが、受講者同士のコメントだけでは、感想の述べ合いや表面的な賛否のやりとりに留まる場合も多く、「自己把握」「他者提示」という目的を達することが難しい状況である。より深いやりとりのためには、言葉の定義や論拠が曖昧なままの主張や、本人とのつながりがよく見えない一般論や理想論の主張などを指摘し、説明を求めるなど、内容に踏み込んだコメントが必要となる。そこで、メンターも個別にコメントをし、やりとりに加わることにしたが、その際、前年までの反省を活かし、文字のみによる発言であることには細心の注意を払った。

具体的には、①暖かい声かけ、②前向きな提案（～するともっとわかりやすくなる）、③プレッシャー除去・参加の促し（完璧でなくても書いてみよう）、④丁寧な言葉遣い（～ていただけますか）、⑤簡潔なアドバイス、⑥謙虚な姿勢（よかったら教えてください）、⑦自分の体験から語り始める等の対話への配慮、⑧具体的な体験を語らせる（どんなことがあったのか聞きたい）等、メンターがそれぞれに工夫を凝らした。一方で、⑧批判的にコメントすることの意義を繰り返し説明し、受講者同士でも積極的に批判し合うよう喚起した。すると、受講者からも次第に「遠慮なくびしびし言ってください」「気を遣わないでやりましょう。すべて自分たちのため」というような発言が出てくるようになった。

3-4 思考と表現の再構築の壁・評価の困難

コメントのやりとりの時点では掲示板の書き込みが盛況となるが、それを吸収して結論を出し、レポートにまとめる3週目になると、途端に書き込みが減り、活動から脱落する者が出る、というのが毎年見られた現象である。これは、卒業等と重なるという时期的な問題も関係しているだろうが、活動としてもここに困難な壁があると考えられる。

活動後の受講者の感想には、「自分の意見や考えに酔っていた私が水をかけられた様な気分になった」「自分の考えがコメントをもらう事で覆されることは、カルチャーショッ

クでした」等という発言が見られた。このことから、コメントの仕方に関わらず、人とコメントをやりとりし、自分の表現や思考を振り返ることが受講者にとっていかに衝撃的な体験であったかがわかる。コメントは大きく二つに分けて、①「動機」の具体化を求め、主張の根拠を尋ねるといった、問題意識の明確化を求めるものと、②「動機」で示された立場に対して、賛否の意見や異なる考え方等を述べるものがあるが、自分の表現がうまく伝わらない現実や価値観の転換を迫るコメントを、どれだけ前向きに受け止められるかが、自らの思考と表現の再構築という壁を乗り越える鍵になっていると考えられる。

また、評価の困難も指摘された。（「こんなにも人の文章を評価するのが難しいのか、一番難しかったのは自分の文章の評価だった」）4週目の「相互自己評価」は、受講者が自分の所属するグループの受講者と自分のレポートについて、3つの観点（①自分の意見が書いているか②他の人の意見に耳を傾けているか③他の人を納得させる論理があるか）から評価を掲示板に書き込むものである。これらの観点は、活動中にメンターから繰り返し提示され、多くの受講者がこれを意識しながらレポートを完成することはできたものの、その半数が相互自己評価への参加を断念し、最終レポートを提出した。評価した経験のない受講者にとって、他の受講者のレポートを一つ一つ読み、評価を簡潔にまとめて書き込むということは、極めて困難かつ負担の大きいものであったと言える。

4. 「文章表現」の活動とその質をめぐって

4-1 受講者のレポートとコメントのやりとりから

はじめに、「文章表現」は受講者が高いモチベーションを持って、自分自身の文章を作っていくという意識がない限り成立しないということを指摘したが、それはこの科目の活動の目的でもあり、同時に質として問われる問題でもある。ここでは、受講者のレポートとコメントのやりとりから具体的な問題を取り上げ、この活動に質について検討する。

以下は、レポートのテーマを一部抜粋したものである。当初のタイトルが最終レポートまでの過程において変化したものについては→で示した。このタイトルの変化の仕方からも、活動を通して各自の問題をより明確にしていることが読み取れるだろう。

[テーマ：一部抜粋]

1. 書くこと	6. 環境問題	11. 時間活用術→時間と共に、有意義に生きるために
2. 私と演劇	7. 中国の貧富の差	12. 日本食→日本の伝統食から現代の抱える問題を読む
3. ゆとり教育について	8. 少子化問題	13. コミュニケーションの重要性→語ることのススメ
4. 部活動の魅力	9. 価値観→モノの価値	14. ダイビング→ダイビングから学んだこと
5. 文化祭	10. テディベアと熊→熊とテディベア	15. 結婚→そもそも結婚する必要はあるのか

＜コメントのやりとりを生むために＞

掲示板上のやりとりを見ていると、コメントが多く集まるものとそうでないものがあることがわかる。もちろん、受講者同士の関係作りのあり方や、コメントを得ようとする態度、他の人のものへ精力的にコメントしているかどうかともコメントの集まりに影響すると

思われるが、ここではテーマそのものに周りが興味を示す場合について考えてみたい。

この活動の「動機」では、自分の興味・関心のある対象 (A) に、自分は (B) という意味づけをしているということを「私にとって (A) は (B) である。」という一文にまとめて他者に提示することが決められている。これを受けて、受講者はコメントを行うのだが、その際、この (A)・(B) のどちらかが参加している受講者にとって身近なものや興味のあるものでなければ、やりとりが盛り上がらない。また、このテーマと自分との関係性の捉え方にはいくつかの種類のあり、それが議論の質に関わるということが指摘できる。

まず、(A) が多くの人にとって身近なもので、主な関心が (A) だけに向けられていて、その意味づけが十分に行われていない場合、たとえば「犬はかわいい」「私の家の犬は柴犬だ」というような表面的なものに陥りがちで、論点を絞りこんだ議論にはなりにくい。

次に、(A) が感覚的に好きだというような内容 (例「私にとってレモンの味は大好きなもの」「私にとって音楽は心を癒してくれるもの」) は、コメントが止まる傾向にある。

また、(B) が、あまりにも常識的であったり、反論の余地がなかったりするとコメントが出にくい。例えば、「部活動は私にとって自分を成長させる素晴らしいものだった」のような場合である。このような場合、詳しく話を聞いて感心することはできても、その成長の中身について掘り下げたり、素晴らしさを追求したりすることはしにくい。

これらは、(A) と (B) の意味づけが十分になされていないこと、(A) と (B) の関係の捉え方が感覚的過ぎること、(A) と (B) の関係の捉え方があまりに常識的であること、などに要約することができる。しかも多くの場合、それらは、「かわいい」「楽しい」「好き」「すばらしい」などの形容詞で捉えられている。形容詞、つまり感情・感覚的な評価としての捉え方に、議論の相手としての他者は入り込む余地を失くしてしまうのである。

以上のことから言えるのは、テーマ設定において対象と自己との関係が十分に把握されていないこと、すなわち自分の立場が形成されていないことに起因する問題があるということである。自分の立場が形成されていないと、話し合う必然性やそのモチベーションも生まれにくい。たとえば、犬やレモンの味は好きでも、自分にとっての「話す必然性」がなければ「好きだから好き」で終わってしまい、周りの人もコメントをする意味を失ってしまう。また、質問や反論をする必然性が感じられるものでなければ、コメントするのは難しい。しかしテーマを選び直させるのがよいというのではない。初めは受講者の興味をひかないテーマでも、メンターが関わり、問題を掘り起こしていく過程において、受講者自らが自分にとってのテーマの「必然性」を見出し、やりとりが活性化していく事例もある。各自のテーマを一人一人の立場の形成と捉え、本人および他の受講者にとっての「必然性」に結びつくものにしていくことが重要だと言えよう。

<コメントのやりとりと展開>

では、具体的にどんなテーマにコメントが集まったかを見てみると、「書くこと」「時間活用術」「テディベアと熊」等が比較的コメントのやりとりが活発であったと言える。「書くこと」も「時間を効率的に使うこと」も受講者にとっては身近な問題であり、各自にひきつけたコメントを出しやすいものだったと考えられる。一方で、「テディベアと熊」は「人に愛されるテディベアとは裏腹に、怖がられ殺される熊たちの違いはどこにあるのか」という発想の奇抜さにひかれ、筆者の問題意識の在り処に関心を持った受講者らが、様々

なコメントを与えたものである。そのやりとりの概要を紹介する。

コメントのやりとりはテディベアのどこが好きかという受講者からの質問とその応答から始まる。

その後、「実在の熊からテディベアへの転換がわかりにくい」という受講者 A からのコメントを受け、書き手 H は「昨年の熊騒動（熊が人間を襲い、射殺されたこと）が気にかかり、同じクマでありながら愛されるテディベアとのギャップに気づいた」と述べる。

「熊を殺すのは人間がいかに勝手な生き物であるかの象徴だ」という受講者 B の言葉をきっかけに、受講者 A は「一方では愛玩道具とし、一方では殺戮する人間の身勝手さに焦点をあてるわけですね。」と自分の考える論点を示すが、H は「テディベアが作られた 1900 年代初めの熊に関する民衆の意識と現在の私たちの意識を比較していこうと思っています。」と、その論点を跳ね除ける。

さらに A がテーマ設定の真意をたずね、H とテーマとの関係を引き出そうとするが、H がテディベアの由来や歴史について延々説明をしたため、A は「わかりました。頑張ってください。」と書き込み、その後コメントをすることはなかった。

書き手 H は、自らの知識を基に、熊とテディベアの処遇の違いを時代による民衆意識の差異からくるものと決め付け、文献を調査してレポートを書こうとし、受講者 A、B の言うことに耳を貸さない。その態度に「議論する必然性」を失った A の姿が見える。

この後、受講者 C が「H さんの『熊とテディベアのそれぞれに対する思いやイメージ』を表現してはどうでしょうか？」と提案する。また C は、H が「動機」の中で熊騒動に強い「遺憾」を感じた点に触れ、なぜ「遺憾」だと思ったのかについてたずね、「凶暴な熊が射殺されることは可哀想だがしかたがない」という自分の意見を述べる。

これに対し、H はテディベアや動物園のクマから、自分がクマに対して温厚なイメージを持っており、人間が襲われると感じるのは、一つの被害意識なのではないかと答える。

受講者 C のコメントは、一旦、H を歴史の知識から引き離し、テーマを H 自身に引きつけて考えさせる働きをしている。これにより、H はなぜ自分が熊の問題に関心を持ったのかという原点に立ち返りつつある。これに伴い、また他の受講者がコメントを寄せた。

受講者 D が住んでいる場所では熊が人を襲う事件があり、D は熊にマイナスのイメージを抱いている。しかし、それがえさを得る環境を奪った人間の責任だと感じていることを述べる。そして、C と同様、「遺憾」の具体的な中身について質問する。すると、H は人が一方的に熊を凶暴なものと考え、射殺することが「遺憾だ」としつつも、実際の熊やいのししの被害の深刻さから、共生の難しさについて語り始める。さらに、言葉の通じない動物のことを人間が慮ることが大切だという D に共感する。

H はコメントのやりとりにより、人間の動物への慮りの不足が「遺憾」の念を生み出していること、自分の問題意識がテディベアと熊の違い自体にはないことに気づいていく。

その後、人間が動物に対し様々なイメージを勝手に被せていることや、「熊」「くま」「クマ」という表記によってそれを使い分けていること、また国によるイメージの違い等、多数の受講者がやりとりに参加して、論点が拡散しそうになるが、ここでメンターがやりと

りに加わり、論点を整理する方向へ導いた。

「動物と人間の共存に議論が落ち着いたようですね」というメンターのコメントを受け、Hは「はじめ考えていたのとレポート内容を変えようかと思っています。テディベアはあくまで比較のもので、実在の熊を取り上げたいんです。だから、テディベアの歴史だのを書くというのではなく……」
 と言い、熊に対して人がなぜ凶暴なイメージを抱くかについての分析を加えるとともに、動物にも人間にも住みやすい環境が必要だという主張で論を結んでいる。熊の話を中心とし、タイトルも「熊とテディベア」に変更した。

Hの結論がまだ理想論的なものであることは否めないが、コメントのやりとりを通して、自らの何気ないテーマ選択が、どのような問題意識から生じたものかを発見したHは、「民衆意識の時代差」という、自分とはかけ離れた知識で物事を説明しようとしたHよりも、はるかに自分に立脚した問題の捉え方ができていると言えるだろう。また、このテーマをめぐり、受講者同士が話す必然性を互いに生み出していく関わり方も大変興味深いものであった。

この他、多くのコメントが出されていたものの、その質に問題が残るやりとりもあった。「中国の貧富の差」「少子化問題」「環境問題」等のテーマについてのものである。中国の戸籍についての説明や、少子化問題や環境問題について知っている事実を皆が出し合うやりとりは、一見活発なようでありながら、問題と書き手やその他の受講者との接点が見えない知識・情報の交換に陥っていた。先の「テディベアと熊」で言うなら、歴史についての説明に終わる状態である。「中国の貧富の差」を書いた受講者Tは、父が実際に中国との貿易に関わっていることや学部選択と今回のテーマが密接なものであったことから、自分が将来何をしていきたいのかという具体的な結論を導くことができたのだが、「少子化問題」をテーマとした受講者Yは感想として「問題の規模が大きすぎて、自分に迫れなかった」と言い、「環境問題」について「政府やマスコミが強制的に環境対策をさせなければならない」と訴えていた受講者Uも、「えらそうに話してきたわたしがあまり環境対策をしていない」ことに気づいたところで活動が終わっている。結果的に自分の問題として捉えることやそれに基づいた議論ができなかったYとUであるが、活動からそれぞれが気づきを得たことには意味があったと言えるだろう。

4-2 活動に対する受講者の評価・感想

活動に関して、受講者から寄せられた感想・意見は次のようなものであった⁷⁾。

活動を評価するものとしては、「オンデマンドのスタイルやBBSでの意見交換、コメントのやりとりを通して文章を書くことが新鮮だった」「新たな視点を持た、価値観が広がった」と、新たな方法や多様な考え方に刺激を受けたことを述べるもの、「これまでの自分を振り返ることができた」「今後の夢や学びたいことがはっきりしてきた」と自分を見つめることができたとするもの、「考えることや人の意見に耳を傾けることの大切さ」について述べた感想が多く出された。また、「書く楽しさを発見した、文章への抵抗感が減った」「全国の同世代と議論できるのが貴重で楽しかった」「実名で参加したので、入学

後に声をかけられる友人ができてよかった」という声もあった。

一方、問題点については、「活発な意見交換を、もっと長い期間行いたかった」「テーマ別のグループ分けをした方がより深い話し合いができる」という意見や、「掲示板への書き込みには時間がかかり面倒だ」というものがあり、「書くことの難しさや、議論の難しさ、評価の難しさ」など難しい面を多く含む活動であったことや、「予想以上に大変な活動だ」と多大な労力を必要とする活動であったことへの指摘もなされた。

メンターについては「もう少し議論に関わってほしい、もっとコメントがほしい」と、より積極的な入り込みを希望する声が多かった。これは受講者同士のやりとりが盛んであったグループの受講者ほど強かった要望である。加えて、「週初めにメンターの書き込みによる指示がないことで、書き込みづらい思いをした」とメンターの指示不足も指摘された。これらは過重な負担により、メンターが毎日多数の掲示板を読み、多数の書き込みをすることに追いついていけなかった状況をよく表していると言える。

4-3 活動に対するメンターの感想・反省

一方、メンター側の感想からは、「毎日何度も掲示板をチェックし、書き込みやレポートを読み、コメントするのが大変」で、「活動の流れに追いつけず、丁寧なコメントもできない」が、「全体への呼びかけだけでは、内容あるやりとりを促すことはできない」というジレンマが感じられた。メンターの数と配置は最大の課題である。

活動の内容については、「事前に「動機」を提出させ、一週目からコメントのやりとりができてよかった」、「相互自己評価の方法を再考する必要がある」「最終レポートの提出者が6割弱というのはまだ受講者の脱落率が高い。最後まで活動した受講者の意見を全てと思わずに、活動のあり方を再検討すべき」等の意見が挙げられた。

この活動の目指す「自己把握」「他者提示」が受講者にどれだけ達成されていたかという質の面から言っても、より丁寧で充実した活動を作り上げることが必要であり、さらなる改善を考えることが重要だと考えられる。そこで、受講者からの意見・メンター自身の反省を基に次の4つ改善案を立てた。

①メンターの配置

1人のメンターが主に担当する受講者数を10名程度とし、100名の受講者には8名のメンターを配置するか、50名の活動を2回に分けて行う。

②コメントのやりとりの充実

受講者の脱落に配慮し、コメントのやりとりの期間を延長せず、2週目のスケジュールを空けておくよう予め受講者に伝える、テーマが似た人同士のやりとりも加えた活動にする。

③相互自己評価の改善

受講者が評価に参加できるように、負担軽減の方法を検討する。

④活動の到達地点の明確化

活動の実態に応じ、その到達地点を柔軟に考える。1) コメントのやりとりを経験する→2) 自分の問題意識に迫る→3) 物事を自分の問題として捉え、一般論やステレオタイプから脱した議論を通して自分の考えを見出す、という段階について検討し、メンターの役割も

より明確なメンター間の共通認識に基づいたものとする。

5. まとめ—結果と考察

5-1 大学入学前教育としての「文章表現」の意義

依然として課題は多いものの、全国実施の「文章表現」が先の2年に比べ、活気あるものとなった背景には、受講者同士がこれから大学で共に学ぶ仲間として、互いに興味を持ち、互いのことを心から知りたいたいと思う関係にあったという事情がある。このことと他者とのインターアクションを重視する活動の特徴とがうまく適合し、レポートの文字や書き込みの奥にいる「人」に目が向けられることで、具体的な「人」と「人」との対話が可能になったのだと言える。1か月後には現実的に出会う相手となれば、発言一つにも気をつけ、自ずとコメントも誠実なものになり、議論にも真剣に参加する。「人」を知りたいという思いは、考えていること＝テーマへの関心にもつながり、そこには「やりとりをする必然性」が確かに存在することになる。学部ごとのグループ分けも功を奏したと言えるであろう。また、大学合格の高揚感のある時期に、大学側からのアプローチとして行われる授業に参加するということは、受講者にとって期待の大きいものだということも考えられる。不慣れな活動を新鮮と肯定的に評価していることから、新しいタイプの授業や初めて出会う人々とのコメントのやりとりを受容しようとする受講者の姿勢が伺える。

また、自分の興味・関心のあるテーマについてレポートを書くことについても、この時期は高校の三年間やこれまでの自分を振り返る時期として、書きたいことを持っている受講者が多いと感ぜられる。中には、テーマが将来の志望や大学での学びに結びついており、この活動を通して自己の問題意識に目覚め、それをより明確なものにして大学の授業に臨もうとする者もいた。このような問題意識の自覚は、今後の大学生活をどう送るかという意味で重要な鍵となるだろう。

さらに、調べ学習などで作成される、知識や情報の羅列に感想を添えたレポートから、オリジナリティを求められる論文へとステップアップするための第一歩としての意義や、議論のあり方や他者の重要性を理解するという意義も、この活動にはあると考えられる。

そしてなにより、「私の問題として捉える」ということは、これまで第三者的に物事を見てきた者を、主体的に問題と関わる方向へ転換させ、主体的な生き方を求めるものである。そのような意味で、ある種の岐路、ターニングポイントに立っている者には非常に適した活動であると言える。

ただ、今回の受講者のほとんどは、関心あるテーマについて自分の問題として議論し、自分の思考と表現を再構築するという境地にまでは至っていない。しかし、自分の視野の狭さや無責任な論じ方、自分の問題として捉えることの重要さ等を自分なりに感じ取った受講者は多く、問題発見解決の面でも「導入教育」と言えるものとなったと考えられる。

5-2 オンデマンド形態による活動実施の要件と課題

オンデマンドという形態について最重要なのは、学習者にとって活動のモチベーションがどこまで持続するかということである。受講者が掲示板を開くのをやめることで、一方的に活動への参加を打ち切ることが可能なものだけに、オンデマンド活動はより魅力的

なものでなければならず、かつ、わざわざインターネット上で行う必要が理解されるものでなければならない。今回の活動は、全国の様々な地方からアクセスして議論できることの驚きや喜びに満ちたものであり、受講者同士がその形でしか場を共にできない状況下にあった。それでも「話せば済むことを全部書き言葉でやること」への疑問や、「実際の人と人とのやりとりと比べると不気味」という意見が受講者から出たことを考えれば、毎日顔を合わせている学生同士が掲示板上でのみやりとりを行う等の活動は、よほど他の必然性を持たない限り、不自然で長続きしない可能性があると言える。

さらにオンデマンド形態の活動で厄介なのは、パソコンがあれば、いつでもどこでもアクセスできるという手軽なイメージから、活動内容までが手軽なものと考えられやすいという点である。今回の受講者の感想には「予想外に大変だった」というものがあつたが、「情報」を好きな時に受け取れるという類のものとは違い、受講者自身の主体的な発言を核にして展開する活動が、たやすくはないと言うまでもないことである。もしも教室に通う時間がない等の理由で、オンデマンド活動の需要が増えるだとすれば、その活動の内容や到達地点の妥当性は、相当の見極めが必要となるだろう。

また、担当側の姿勢としても、オンデマンド形態を利用すれば、多くの受講者をさばけると考えるのも安易だと言うことになる。特に、今回の活動のように双方向のやりとりで成立する活動では、一人一人に応じた「反応」が好きな時に得られなければならない、速やかな「反応」がなければ、受講者のモチベーションは目に見えて下がる。そのため、メンターは随時掲示板を開く覚悟を持ち、一人一人のテーマだけでなく、その感情や性格にも配慮するという困難な役割を担うことになるだろう。

また、掲示板上で文字のみによるやりとりに関して言えば、すでに述べたように文字の奥にある人間の存在に目を向けさせる条件と工夫が必要である。書き言葉を使いながらも、言いたいことを箇条書きするような状況を作ることなく、対話で人と人とを結んでいけるような支援が必要である。やりとりが文字で残ることのメリット（振り返りやレポート作成のための記録となること）やデメリット（きついコメントがいつまでも残ること等）も踏まえて、掲示板を受講者にとってより有効なものにしていくことが必要である。

おわりに

「文章表現」の活動は、人と対話する、自分についての考えを深める、問題を自分の問題として捉える、他者に考えていることをわかりやすく提示する、他者の考えを受容するというような活動内容の面でも、オンデマンドという形態の面でも、特に2005年度の全国を受講者にとってさまざまな「必然性」⁽⁸⁾が感じられるものであったと考えられる。

ただ、この「必然性」という概念自体、担当者や学習者にとって固定的なものではなく、むしろ活動の流れの中で絶えず変化しているものだと言えよう。一口に必然性といっても、外的なものとの内的なものとの間があるといえようし、その両者の境界は曖昧である。

最後に改善案を示したように、「文章表現」はまだ発展途上の活動である。特に、メンターの支援のあり方とその養成は大きな課題だと言える。それはとりもなおさず、活動の質を向上させることにつながるからである。

今後は、「総合活動型日本語教育」の活動として、より「ことば」の奥の人との対話が

成立し、そのことを通して参加者一人一人の思考と表現が活性化する活動へと、この活動を進化させていきたいと考えている。

注

- (1) 入学前教育の場合、大学入学前の2～3月中の4週間が活動期間とされているため、この4週間に、受講者が自宅や学校のパソコンから、自分の都合のよい時間に指定されたサイトにログインして活動に参加する、いつでもどこでもアクセスできるプログラムとして設定した。
- (2) 細川はすでに2002年度からオープン教育センター所管のオンデマンド講座「考えるための日本語」を担当しているほか、留学生向けの日本語講座「総合3-6」や大学院日本語教育研究科理論研究「言語文化教育研究」においてもオンデマンド方式を採用している。
- (3) 本年度よりTAという呼称を「メンター」(助言者)に改めた。これは、活動中の受講者に対する役割の実態により近い呼称だということによるものである。
- (4) 第一文学部
- (5) 第二文学部・社会科学部
- (6) 人間科学部・国際教養学部
- (7) 相互自己評価の際、活動に対する要望・意見を掲示板または最終レポートに書くよう受講者に指示した。
- (8) オンデマンド方式に関しては、対面式授業と比較し、教育的側面からは否定的な意見が多く、効率や経済性からは評価する意見が見られるが、本稿で明らかのように、決して効率的かつ経済的な面で有効であるとはいいがたい面を持っている。一方、教育的側面からの、クラス活動は本来対面式であるべきであるというような意見に対しては、細川はやや疑念も持つ。オンデマンドによる文字だけのコミュニケーションが文体の向こうにある「人格」を読み取る想像力を自覚させ、建設的な空間を創造しうる可能性も持ちうるからである(尹2004)。

参考文献

- 牲川波都季・細川英雄(2004)『わたしを語ることばを求めて表現することへの希望』三省堂
 細川英雄(1999)『日本語教育と日本事情—異文化を超える』明石書店
 —(2002)『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践』明石書店
 「総合」研究会編(2003)『「総合」の考え方と方法』早稲田大学日本語研究教育センター
 細川英雄・牲川波都季(2001)「表現の扉をひらく—早稲田本庄高等学院「日本語表現総合」(2000年度1学期)の試み—」『早稲田教育評論』第15巻第1号
 尹菊姫(2004)「BBSの持つ機能を活かして「伝え合う」ための文字コミュニケーション—BBS上文字コミュニケーションの意義と日本語教育への可能性」早稲田大学大学院日本語教育研究科2004年3月修了修士論文

付記：本稿は、「はじめに」を細川が担当し、その後、細川の提案を受けて、森元が全章を執筆したものである。全体の構成等に関しては、脱稿後、相互に読み合わせを行い、加筆修正を行った。なお、本稿は、2005年度のメンター4名(牲川波都季・武一美・三代純平・森元桂子)の合議による検討会資料をもとに作成されたものである。